

氏名	宮良 淳子	(学籍番号 20DN04)
学位の種類	博士(看護学)	
学位記番号	32号	
学位授与年月日	2024年3月7日	
論文題目	不登校生徒がフリースクールへの登校を機会に社会に歩み出すプロセス	
論文審査担当者	委員長 宮谷 恵	教授
	委員 市江 和子	教授
	委員 河口 てる子	教授
	委員 酒井 昌子	教授
	委員 伊藤 信寿	教授

論文要旨

I. 研究背景と研究目的

不登校の子どもは増え続けており、不登校は、きっかけさえあればどの子どもにも起こる可能性がある。不登校という行動の奥にある不登校生徒の抱えている発達段階における課題を見過ごさず、課題の克服にむけて子どもの気もちの揺らぎに細やかに対応するための支援が求められる。本研究の目的は、中学校や高校を不登校となった子どもがフリースクールをきっかけとし社会に歩み出すプロセスを明らかにし、子どもの健やかな発達を支援する看護学の立場から、フリースクールへの登校を機会に社会に歩み出すプロセスから不登校生徒が直面している発達段階の課題や心理的葛藤を乗り越えるための支援を検討することである。

II. 研究方法

- 研究デザイン:** 質的帰納的研究である。半構成的面接を実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。
- 対象者:** 第1研究では中学・高校で不登校経験があり、フリースクールに通ったのち、再登校や進学、就職などで社会に歩み出した経験者を対象とした。第2研究では、フリースクールで1年以上の指導経験を有した不登校生徒の指導経験のある職員を対象とした。

III. 倫理的配慮: 本学倫理委員会の承認を得て実施した。

IV. 結果

1. 第1研究: フリースクールをきっかけとし不登校生徒が社会に歩み出すプロセス

15名のデータを分析し、42の〈概念〉と17の【カテゴリー】が生成された。不登校生徒がフリースクールをきっかけとし社会に歩み出すプロセスは、【自分の心を閉ざす】ことから始まり、家庭という【都合のよい場所から動かない】生活をしていた。病院で【医療者は味方】と感じる経験をするが、【不登校で取り残される気がかり】があった。【心が穏やかになる】変化が起きると【自分の外に目が向く】ようになり、【受け入れてくれる場所との出会い】をしていた。【フリースクールは自分らしくいられる場】と

感じ【人とつながる】経験をし【フリースクールの外を意識し学力をつける】が、一方で、【思うようにいかない苛立ち】と【不登校の自分への苛立ち】を感じていた。フリースクールで【体験によって自信が芽生える】ことで、【目標が進学になる】と、【同年代の伴走者】に気持ちを後押しされ、【不登校から道がひらける】ようになり、進学し【自分軸を見出す】ことをしていた

2. 第2研究：フリースクール職員が認識する不登校生徒が社会に歩みだすプロセス

16名のデータを分析し、32の〈概念〉と12の【カテゴリー】が生成された。フリースクール職員が認識する不登校生徒が社会に歩みだすプロセスは、不登校生徒が【暗闇にひとりぼっち】と感じることからはじまっていた。【活力が湧かず立ち止まる】状態であり【家で羽を休める】生活をしてきたが、【不登校は長いトンネル】と感じ、【トンネルをぬきたい】と思っていた。フリースクールと出会うと【トンネルの先にある希望】を抱き、【フリースクールでのやすらぎ】を感じていた。【自然体でいられる】ようになり、【フリースクールでの経験から内面が成長】し、【フリースクールの外に目が向く】ようになった。【自立心の芽生え】が生じ、【自分らしく生きる】ことをしていた。

3. 第3研究：第1研究・第2研究の結果の統合

不登校生徒がフリースクールへの登校を機会に社会に歩みだすプロセスは、「家庭にとどまっている時期」に不登校生徒を感じる『不登校の居心地の悪さ』からはじまっていた。不登校生徒はフリースクールに通いはじめると、フリースクールに『居場所がある』と感じており、『居場所がある』なかで『自立への思い』を抱き、発達課題を克服し『自我を発見』する軸がみられた。不登校生徒は『不登校の居心地の悪さ』のあるなかで【医療者は味方】という思いをもっており、フリースクールに『居場所がある』と感じているなかで【思うようにいかない苛立ち】や【不登校の自分への苛立ち】という葛藤があった。

V. 考察

『不登校の居心地の悪さ』を感じている時期に出会う外来等の看護職は、不登校生徒にとって重要他者となりうることを示唆される。不登校生徒が【医療者は味方】と感じることのできる温かいかわりが求められると考えられる。不登校生徒は葛藤しながら成長していると考えられるため、葛藤に向き合い乗り越えられる居場所の確保が求められる。不登校生徒は、他者とかかわりながら自己のなかに肯定的要素をみつけ、フリースクールをきっかけとし、フリースクールの登校を機会に『自我を発見』し、社会に歩みだすと考えられる。

不登校の子どもと保護者への看護支援として、看護職は、誰にも理解されないと感じている不登校生徒の気もちに寄り添い、不登校生徒が安心して学校を休むことができるよう、医療の立場から相談に乗り、保証していくことが求められると考えられる。病棟の看護職は入院環境のなかで子どもがこころの安らぎを得られるよう環境調整し、自分と向き合うことができるよう見守り寄り添うことが必要だと考えられる。看護職がおとなとしてのロールモデルとしてかわることによって、不登校生徒が自分と向き合う力を得ることができると考えられる。保護者が子どもへのかかわりに対する自信を失わないよう支援し、不安や自責の念をひとりで抱え込まないよう、社会的資源につながるための情報を提供することが求められると考えられる。

VI. 結論

第1研究では、フリースクールをきっかけとし不登校生徒が社会に歩みだすプロセスは、【自分の心を閉ざす】を始点とし、【同年代の伴走者】に気持ちを後押しされ【自分軸を手に入れる】へ変化していた。第2研究では、フリースクール職員が認識する不登校生徒が社会に歩みだすプロセスは、【暗闇にひとりぼっち】を始点に、【自立心の芽生え】を生じ【自分らしく生きる】へと変化していた。2つのプロセスを統合した結果、不登校生徒がフリースクールへの登校を機会に社会に歩みだすプロセスは、不登校生徒が家庭にとどまっている時期の『不登校の居心地の悪さ』を始点とし、フリースクールに『居場所がある』なかで『自立への思い』を抱き、発達課題を克服し『自我を発見』する軸が導き出された。

論文審査の結果の要旨

本研究は、フリースクールによる不登校生徒への支援に関心を持つ著者が、不登校生徒がフリースクールをきっかけとし社会に歩みだすプロセスを明らかにし、子どもの健やかな発達を支援する看護学の立場から、不登校生徒が直面している発達段階の課題や心理的葛藤を乗り越えるための支援を検討するために、不登校経験者とフリースクール職員を対象とした半構成的面接を実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析したものである。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチは木下によって考案され、分析ワークシートを用いて概念を生成しカテゴリーにまとめそれらの関係性を図示化することによって理論的構築を行うものであり、人間行動の実践理論の生成に有効であるとされている。

本研究では半構成的面接で得られたデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法で記述、分析を行い、生成した概念の関係性を図示化することで、不登校生徒とフリースクール職員のそれぞれの調査から得られたプロセスを統合し、登校生徒がフリースクールをきっかけとし社会に歩みだすプロセスとして明らかにした。

本研究は半構成的面接で得られた膨大なデータを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法で緻密に分析を行った。分析によって不登校生徒がフリースクールをきっかけとし社会に歩みだすプロセスを、当事者の視点だけでなくフリースクール職員と双方の視点からの調査により妥当性と信憑性を高め、明らかにしたことが特長である。さらに、臨床において不登校生徒に関わるが増加しつつある、看護職による不登校生徒と保護者への看護支援について考察したことが評価された。今後についても、今回の結果を看護職や多職種に提示し検証すること、その上で実践的活用を具体化していくという課題と展望が明らかになっており、研究の発展に期待が持てる。

以上の結果から、本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認められた。